



Title	元留学生社会人のライフストーリー：日本在住韓国人の言語習得とアイデンティティを中心に
Author(s)	イ, ヒョンジュ
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2019, 53, p. 39-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

元留学生社会人のライフストーリー

——日本在住韓国人の言語習得とアイデンティティを中心に——

イ・ヒョンジュ

キーワード：元留学生社会人／ライフストーリー／アイデンティティ／第二言語

1. はじめに

少子高齢化が急速に進行する日本では、労働力の確保が重要な課題となっている。日本政府はこれまで「留学生30万人計画」、「高度人材受入推進」、「外国人労働者受け入れ拡大」政策を掲げ、2018年には、外国人労働者の受け入れを拡大するための出入国管理法改正案が成立した。日本の外国人高度人材の供給源として、留学生は貴重な存在である。こうした観点から、留学生に対する日本語教育や支援に関する研究は多岐にわたって行われている。しかし、卒業後、日本に就職した元留学生の動向や状況に関する研究は、十分とは言えない（原田2015, 横須賀2015, 池田・八若2016）。母国を離れ、日本に留学し、社会人として日本に住む外国人は、度重なる環境の変化や日本社会への適応の要請の中で、自らのアイデンティティをどのように構築し、暮らしているのだろうか。本稿は、2名の韓国人元留学生社会人に焦点をあて、彼女らのこれまでの経験をライフストーリーを通して理解することを試みた。第二言語を使用し日本で暮らしていく中で、どのような経験をしてきたのか、その過程を記述し考察する。

2. 先行研究

1990年代後半から、第二言語習得の研究において、社会的な存在として

の学習者のアイデンティティの重要性が指摘されはじめ、第二言語習得とアイデンティティの関係が注目されるようになった。第二言語話者のアイデンティティに注目した代表的研究にNorton（1995, 2000, 2013）がある。Norton（2000）は、カナダにおける5人の移民の英語学習の経験を分析し、言語習得とアイデンティティは、個人と社会との「力関係」に影響を受けることを明らかにした。母語話者との社会的力関係の中で、自身が望むアイデンティティを模索し、その確立に向けて言語習得への「投資」が行われ、その「投資」によって「話す権利（right to speak）」を獲得すると主張した。すなわち、学習者がおかれた社会の中で、こうありたいというアイデンティティを持ち、その実現への「投資」として言語学習を位置づけている。Norton（1995：17-18）によると「投資」は、学習者が目標言語を話す際に、単に情報交換をするだけでなく、自分は何者であり、社会とどのように関わりを持つのかを絶えず整理し再構成していることを前提としている。

Norton（2013：50）は、ブルデューの「文化資本」という概念を参照したうえで、「文化資本」とは特定の場所を特徴付ける知識や考え方であるとしている。¹⁾ 学習者が第二言語を習得することは、より広い範囲の象徴的かつ物質的資源を獲得することであり、彼らの「文化資本」の価値を高めることであると述べている。すなわち、言語習得への投資によってこれまで達成できなかった資源にアクセスできるようになることを示唆している（Norton 1995：17-18）。

アイデンティティには様々な定義が存在するが、Norton（2013：45）は、以下のように定義している。

I use the term identity to reference how a person understands his or her relationship to the world, how that relationship is constructed across time and space, and how the person understands possibilities for the future.

（私は、アイデンティティという用語を、人が自分と世界との関係をどのように理解しているのか、その関係が時間と空間に渡ってどのように

構築されるのか、将来の可能性をどのように理解するのかを表すために用いる）（筆者訳）

ここで特筆すべきは、アイデンティティとは、「可変的」なもので、他者との関係の中で再構築されていくという点である。

横須賀（2007）は、企業側が留学生に対し求める要件に、優れた日本語力に加え、日本人と協調ができる「日本人性」の高い人材であることを明らかにした。さらに、横須賀（2015）は、日本で働く元留学生115名を対象に調査を行った結果、対象者の6割以上が言語やコミュニケーションの問題、日本人と自身の間での価値観のギャップなどに問題を感じていることを明らかにした。母国を離れ、日本に留学し、社会人として日本に住む外国人は、度重なる環境の変化や日本社会への適応の要請の中で、多様なアイデンティティが形成されることが先行研究によって示唆されている。小泉（2011）は、言語を学ぶことは、「新たな文化に触れながら、言語が使用される文脈の中で個人のアイデンティティを形成し再構築するプロセス」であり、その過程を明らかにすることは、「個人・言語・アイデンティティの関係性をより多角的かつ包括的にとらえ直すという極めて重要な意義がある」（小泉2011：139）と述べている。

以上の先行研究が示した視点を踏まえ、本稿は、留学生として来日し、大学を卒業後、日本で就職した外国人に焦点をあて、これまでどのような経験をし、その経験から彼らは何を感じており、そこにはどのような学習や変化があったのかその過程を明らかにする。そのうえで、個人がおかれた社会的文脈の中で、他人との相互作用によってどのようなアイデンティティが構築されてきたのかその要因を探る。

3. 研究方法

本稿では、研究方法としてライフストーリーという方法を用いる。ライフ

ストーリー研究は、人生における経験がどのように構成され、いかに意味づけているかに迫る研究方法である(やまだ 2007)。Aoki and Kobayashi (2009) は、研究において、唯一の客観的な現実というものは存在せず、現実是我々の相互行為によって共同構築されるものであるとした。ストーリーとは因果関係によって並べられた2つ以上の人間行動もしくは出来事であり、ストーリーを信じるか否かは、そのストーリーの因果関係にもっともらしさを感じるかどうかによる。ライフストーリーは、現在に至るまでのある人物の人生における特定の行動や出来事が時系列に並べられ、ひと続きになったものを意味する。川上(2015)は、日本語教育におけるライフストーリー研究は、「これまであまり知られていなかった学習者の視点からの言語学習、特に社会的な関係性の中でどのように学習を進めているのかを学習者の意味づけを含めて明らかにしようとしている研究」(p.34)であると主張した。

本稿は、元留学生社会人がこれまでどのような経験をしてきたのかに関心があり、そうした経験が彼らにどのような影響を与えるかを理解することを目的としている。そのため、研究対象者のある側面を変数としてとらえ数量化し、統計的分析を行うようなアプローチではなく、対象者の経験と生活を理解するために、彼らが語る言葉に焦点を当てるアプローチをとる。

4. 調査概要

調査協力者は、ジナさん、ムンさんの2名の韓国人であり、いずれも韓国の高校を卒業後、日本の大学に進学し、日本で働いている。ジナさんは、ソウルで生まれ育った30代後半の女性である。二度の転職を経て、現在、自動車部品の製造販売企業に勤務している。一方、ムンさんは、韓国の慶州で生まれ育った20代後半の女性である。日本企業でのインターンシップを経て、現在、顧客支援アプリ関連会社に勤務している。ジナさんは、筆者と大学の同期である。一方、ムンさんは、筆者がかつて勤務した会社の後輩からの紹介である。

ライフストーリー研究において、調査協力者がどのようにして今の状態に至ったのかを理解するために、調査方法として主にインタビュー法が用いられる（やまだ 2007, Aoki and Kobayashi 2009）。本稿では、インタビュー方法の中でもより自由な形式の半構造化インタビューを用いる²⁾。ジナさんに対しては2017年11月から2018年10月にかけて計3回、ムンさんに対しては2018年6月から11月にかけて計2回のインタビューを実施した。インタビューで録音したものはすべて文字化し、出来事の因果関係を探りながら過去から現在まで時系列に並び替えストーリーを作成した。出来上がったストーリーは、協力者の確認を受け、訂正作業を行った。

5. 協力者のストーリー³⁾

5.1 ジナさんのストーリー

高校時代のジナさんは大学受験に向け、勉強三昧の生活を送っていた。大学合格が唯一の目標だったジナさんは、高校時代の思い出として、勉強以外はほとんどないという。周囲に明るくてクラスのリーダー的存在の友達が大勢いたが、ジナさんは「内向的で、あまり目立たない存在」だった。勉強も中途半端でスポーツもできなかった。そのため、勉強もでき、スポーツもできる友達をみてずっと羨ましいと思っていた。楽器や部活動をする友達が羨ましかったが、ジナさんが「行動に移すことはなかった」。高校3年間必死に準備していた大学受験に失敗した。唯一の目標だった大学受験に失敗し、浪人を考えていた矢先に、日本に居住している叔母から留学をすすめられた。ジナさんはその時初めて日本留学を意識した。日本に留学することは、自身でも驚くほどの選択だった。それまでは、周りの友達と同じように、韓国の大学に進学し、韓国で就職するという平凡な暮らししか想像したことがなかった。友達と違う選択をすることに不安と悩みが募った。しかし、1年浪人をして、韓国の大学を出るよりは、日本語を身につけ、日本の大学を出た方が後に就職するにあたり、「周りの友達より少し有利になる」という期待

感があった。日本で競争力をつけ韓国で就職しよう、そう考えたジナさんは日本へ渡った。

大阪の叔母の家で、ジナさんの留学生活が始まった。来日早々日本語学校に通い始め、学校卒業までの1年半、日本語漬けの生活を送った。毎日のように朝から午後まで日本語の授業を受け、帰宅後も日本語の勉強に余念がなかった。日本語の勉強はとても楽しく、成績も良かった。大学進学に向け、着々と準備を進め、大学受験に必要な「N1」（日本語能力試験の最高レベル）に合格した。当時大阪に住んでいたジナさんは、東京の大学に憧れていたため、卒業後、叔母から離れて生活することを心に決めていた。

来日して1年半後、ジナさんは、目標だった日本の大学への進学を果たした。自身を「内気」で「内向的」と評価していたジナさんは、「大学に入ってから、積極的になった」と語った。積極的に行動しない限り、友達を作ることも、何かを学ぶこともできないと考え始めたという。そして彼女は、入学して間もない頃、剣道部に入る決心をした。日本人の友達を作りたいという気持ちはもちろんのこと、授業だけではなく、部活やサークル活動などを通して大学生活を満喫したいという気持ちがあった。さらに、そのような活動を通じて日本の文化について学びたいと考えた。いざ剣道部に入ってみると、大学入学が普通の日本人より遅れていたジナさんは、剣道部員の中の3年生と同じ年齢だった。しかし、その同じ年齢の部員と「友達になれる」と思って接したところ、異様な雰囲気を感じたという。韓国では人間関係を決める際に、学年よりも年齢が基準になるが、日本は年齢よりも学年が基準になる。韓国において、友達とは一般的には同じ年齢のみの関係であるが、日本の場合、そうとは限らなかった。剣道部で初めて韓国と日本の文化の違いを経験した。ジナさんの心の中で「戸惑いはあった」が、ある組織に入るためには、その組織のルールに従うしかないと考えていた。そして「そういうもんだと受け入れる」ことにしたという。このような経験があったからこそ日本の文化を知ることができた。大学4年間、剣道部に所属していたことは、大学生活においての一番の収穫であると当時を振り返った。

日本での就職を決心したのは、大学3年生のときだった。留学当初は、韓国に戻り、日本語が活かせる仕事に就きたいと考えていた。しかし、就職活動をしていた周囲の友達に刺激を受け、日本で就職を経験したいと考えるようになった。さらに当時大学で仲良くなったA先生の授業を受けたことがきっかけとなり、日本の政治に興味を持つようになった。日本での就職を決意したのは、その先生の影響も大きかった。「日本でもっと勉強したい」、「政治にかかわる仕事」がしたいと考えた。政治にかかわる仕事がしたいと考えていたジナさんは、最初は日本の放送局に絞り就職活動を行った。しかし、すべて不採用に終わった。その後、ジナさんは、韓国との取引があり、外国人採用を積極的に行っている会社を中心に就職活動を再開した。

最初の就職先は、韓国関連飲食店を展開している会社だった。まず店舗で経験を積み、能力に応じて本社に昇進するシステムの会社だった。接客を中心とする仕事で、難しいと感じる業務はそれほどなかった。しかし、留学生時代と比べ、自身が話す日本語を意識するようになったという。顧客とのやり取りの中で、最初自身の顔だけでは外国人であることを気づかれることはなかった。しかし、会話が進むにつれ、だんだん外国人であることが気づかれていくことに気がついた。外国人と気づかれることは、自身の日本語が十分でないことを意味していた。「日本人に見られたい」、そう見られることが「日本語に問題ない」証拠だと考え始めたという。一方で、同僚や会社の先輩との出会いは、ジナさんの人生観を大きく変えるきっかけとなった。「周囲に自立した」同僚が多く、彼らは、目標や夢を持ち、それに向かって一生懸命働いていた。些細なことで悩む自身とは異なり、彼らは、ポジティブな考え方をもち、積極的に前に進んでいた。下積みから少しずつ努力を積み重ね、確実にステップアップしていく彼らの姿から、ジナさんは「熱心に努力をすれば報われる」という信念を持つようになった。そして彼らのように「周りに迷惑をかけない」、「自立した」存在になることを意識し始めた。就職して3年半が経ち、ジナさんは接客業の厳しい労働環境に疲れを感じていた。この生活がこのまま続いたら「この先どうなるのだろう」と不安が募った。

それでも韓国に帰ることは、考えていなかった。日本で3年半働いただけでは、「満足できなかった」。もう少し「日本でいろんな経験をしてみたい」という気持ちがジナさんを日本に留まらせた。そして、自身がより「成長」できる環境を求め、転職を決心した。2回目の就職先は、韓国政府関係の会社だった。ビジネスメール、電話対応、報告書の作成、会議での打ち合わせなど、初めてのことばかりだった。ジナさんは、転職して初めて自身の日本語能力の不十分さに気がついたという。本を参考にしたり、秘書検定試験に挑戦したりするなどし、自身に足りない部分を必死に補っていた。日本企業と韓国企業の間で仲介役を務めていたことから、両企業の仕事の進め方にギャップを感じていた。日本企業の場合、何かを決定するにあたり、慎重且つ時間がかかることに対し、韓国企業の場合、決断は早い、仕事の上で感情的になることがあったという。日本人は自分の立場を言う前に、まず相手の気持ちを考え、慎重に話しを進めるが、韓国人は自身の立場を優先に考える傾向があった。韓国企業のビジネススタイルに「ストレス」を感じていた。「私には日本の企業が合っている」。そして3年半で退職を決めた。

ジナさんは現在、自動車部品の製造販売会社（日本企業）で、バイヤーの仕事を担当している。今年（2019年）で6年目になる。取引先がすべて日本企業であることから100%日本語で仕事をこなしている。日本語に加え、部品関連の専門的な知識やバイヤーとしての知識も必要とされているため、入社当時は慣れるまで大変だったと振り返った。外国人ではあるが、日本人の同僚と同じような仕事を任されている。入社当時は、言葉の壁を感じることもあったが、外国人だからといって特別に苦労をしたことは、「言葉以外に特になかった」。業務上わからないことがあった場合、本を見ながら自力で勉強したり、先輩社員を真似したりしながら仕事をこなしていた。「周りに迷惑をかけない」ということを常に考えながら仕事に取り込んでいた。その考えは今でも変わらない。与えられた仕事は、できるだけ早く処理し、何事もあまり時間をかけずに素早く処理できる能力が入社当時と比べ身についてきたと今の自分を評価した。

ジナさんの思う外国人が日本で働くうえで重要な点を次のように語った。まず、「周りに合わせながら仕事」を行うことである。会社という組織の中で働いている以上、組織の一員として組織のためのことを考え、周りと協調しながら仕事をこなすことが大切と考えている。また、社内の人だけではなく、外部の人とのメールのやり取りも頻繁に行われている中、「相手を傷つけないような言葉遣い」も大切と語った。ジナさんにとって日本で働くことは、もはや「特別なことじゃな」いようだ。最初は「日本で働くことが特別な意味」を持っていたが、今はそれが「当たり前の生活」になっている。来日してから失敗を恐れずに色々なことにチャレンジしてきた。そのおかげで韓国にいればできなかったことをたくさん経験できたと感じている。もし、韓国にいたならば、友達と同じように専業主婦になり、「平凡な人生」を送っていたのかもしれない。そういう平凡な人生が良いと思った時期もあった。しかし、今こうして振り返ると、日本に留学し就職の「経験ができたこと」は、「とても良かった」。「今の生活で良かった」と語った。日本語を使用し生活する意味をジナさんは、次のように語ってくれた。

ジナさん：私にとって日本語は、もはや外国語ではないです。以前はいくら私が日本で暮らしても私の母国語は韓国語という気持ちがあったんですけど、今は、私の生活のほぼ100%が日本語だから（日本語は）外国語じゃない。以前のように一生懸命勉強しなくても毎日身につく日本語があるし、日本語に特別な意味がないんです。会社の人たちが、“ジナさんは韓国語も話せるし、日本語もできるし”とか言うんですけど、日本語を話すのは、私にとって当たり前のことなので“ジナさん、日本語うまいですね”という言葉を聞くと嬉しいと思わないですし、（日本語を話すことは）当たり前なのになんでそういうこと言うんだろうという気持ちになります。

ジナさんにとって日本語は「外国語」ではなく、日本語を使用し生活する

ことにも、「特別な意味」を付与することのできない、ごく「当たり前」の
 ことのようにだ。

5.2 ムンさんのストーリー

ムンさんは、中学生時代、韓国のケーブルテレビで流れていたアニメの『ONE PIECE』が大好きだった。観ているうちに続きが気になり、インターネットで調べたところ、『ONE PIECE』が日本のアニメであることを知った。原作を観るために日本語の勉強を始めた。中学校3年間、名門高校へ入学するため必死に勉強し、合格したが、入学した途端に成績がさがった。ダンスが好きで毎日練習に時間を費やし遊んでばかりいた。そんなある日、突然、進路について考えた。友達から「あなたは日本語が上手だから日本語の専門学科に行ったら」と言われた。それを聞いたムンさんは、「漠然に、日本語学科にいこう」と考えるようになったという。周囲の友達は皆ソウルの大学を目指していた。ムンさんもソウルの大学を目指し日本語のスクールに通い始めた。そして、高校1年生の時に「人生を変える」出来事に遭遇した。修学旅行で九州を訪れたときだった。夜遅く温泉に行くと日本人女性が一人いた。

ムンさん：＜前略＞初めて（日本人と）会話をしたんです、（日本人女性から）“旅行にきましたか？”（と聞かれ）“はい、旅行にきました”って話をしたんです、その瞬間、何か、ばばばーって、何ていうかな、ひらめいた感じ、私って井戸の中の蛙だったんだと思ったんです、私が第2外国語でコミュニケーションを取っているなんて、＜中略＞本当に私の人生を変えましたよ。

修学旅行先で日本人と日本語でコミュニケーションが取れたことは、「人生を変え」る出来事だった。その出来事をきっかけにさらに日本語の勉強に拍車がかかった。放課後、日本語スクールに通い続けた。日本語スクールに

通ったのは、日本語学科に入るため以外にも、「ヤザ（夜間自習学習の略語）がやりたくなかった」という理由もあった。⁴⁾ある日、日本語スクールの先生から、日本に留学している韓国人留学生の話が聞かされた。ムンさんは「留学」という言葉を聞いてとても驚いたという。当時、ムンさんが住んでいた慶州は、「ド田舎で留学の前例がなかった」。韓国の大学の日本語学科に進学することばかり考えていて、日本への留学は一度も考えたことがなかった。日本語スクールの先生から聞いた「留学」という言葉に刺激を受け、その日の帰りのバスの中で、日本への留学について調べた。両親や友達に留学したい気持ちを打ち明けると、誰一人賛成する人はいなかった。それでも「押し通した」のは、「夢があった」からだ。慶州では留学に行くことが非常に珍しいことで、大学進学と言えば、ソウルの大学か、釜山大学のような国立大学を目指すのが一般的だった。しかし、ムンさんは、学校の成績が悪く、なおさら留学に目を向けていたのだ。留学への決心が揺らぐことはなく、意志を押し続けた結果、父から1年限りの留学が許された。

来日前、自身の「日本語が上手」と思っていたが、いざ日本語学校に入ってみると、ムンさんより日本語が上手な人が大勢いた。「ショックを受け」たが、「一生懸命に頑張らなきゃ」という気持ちにはならなかったという。それよりは、「自由」に「遊ぼう」という気持ちが強かった。「厳格」な父から離れて、自由を満喫した。「とても幸せ」だった。日本語学校に通い初めて3か月が経った頃からムンさんの思う「生の話」（授業で習う定型表現ではない自由な会話）ができるようになった。「生の話」ができるようになった頃から日本人と接する機会を増やすためにアルバイトも始めた。日本人のアルバイト仲間と「日常的な会話」をよく交わしてした。そのおかげもあって「日本語がとても伸び」た。日本語学校に入学して、1年が過ぎ、一緒に遊んでいた友達は皆それぞれの国に帰って行った。来日当初、父とは1年で韓国に帰ると約束していた。しかし、ムンさんは、日本語学校で「EJU（日本留学試験）」のクラスを受けるなど、来日当初から日本の大学への進学を視野に入れて準備していた。そして、1年で日本語学校を卒業し、日本の大

学に進学した。

楽しい大学生活を「夢見て」いたムンさんだったが、大学時代は楽しかった記憶が「一つもない」という。大学1年生のときからゼミに参加した。あまり親しくない韓国人男性二人がいたが、韓国人女性は、ムンさん一人しかおらず、日本人の女の子グループに入ろうとしても、「私は非主流という気持ちがあった」ため、「なかなか交われなかった」という。それに「ストレス」を感じていた。ゼミの飲み会に参加して楽しく遊んだ後も、うわべだけの付き合いに留まり、友達にはなれなかった。「自己紹介をするときから視線を感じ」、「私はこの人達と違う」、「私は非主流」だと感じるようになった。「気持ちが萎縮」した。そんなとき、支えになってくれたのが、当時、交際していた韓国人の金さんだったという。

韓国の厳しい就職事情を考えると、日本での就職経歴がキャリアアップにつながると考えたムンさんは、大学3年生のとき、就職活動を始めた。ムンさんの「非主流」という気持ちに変化が現れたのは、大学3年生の時、インターンシップに参加したことがきっかけだった。

ムンさん：大学3年生の時にインターンをしました。その時も心の中では、私は非主流という気持ちがあって、やりたくなかったんです。でも、ふと思ったんです、考え方を切り替えようって。＜中略＞積極的に発表して、主導的にやったら、（インターンシップ先の担当者が）高く評価してくださって。私と一緒にインターンをしてた子たちみんな日本人だったんですけど、その子たちとも交わるようになりました。私が意見を述べると、私の意見を聞いてくれて、一緒に活動していくうちに交わるようになって、そのとき初めて感じました、ああーこんなふうにしたらいいんだって。その担当者からもメールが来て、そのメールまだ持ってるんですけど、私をととても褒めてくれました。“一番積極的で、一番よくできました、これから素晴らしいキャリアウーマンになれると思います”と。読んだら涙

が出るほど、良い言葉ばかり書いてくださいました。とても勇気をもらいました、私もやればできると思ったんです。

インターンシップの経験を通し、「非主流」という考え方に変化が現れ、「自信がついた」。韓国人と日本人を別々に「カテゴリー」化するのではなく、「一人の人間として接することができ」るようになった。このような考え方は社会人になってからさらに強まり、そのおかげで「今の自分がいる」と語った。

ムンさんの最初の就職先であるK社は、韓国のベンチャー企業で、日本に支社を設立する準備をしていた。ムンさんはスタートアップメンバーとして雇われた。メンバーと言っても、社員はムンさんたった一人で、製品の翻訳から、顧客の管理まであらゆることを任されていた。入社後しばらくして日本支社が設立され、日本人の同僚もできた。製品の翻訳はもちろん、飛び込み営業や約款の翻訳、弁護士相談など、会社としての土台を作るため、あらゆることをこなさなければならなかった。飛び込み営業は、実に300件を超えていた。スタートメンバーだったため、当然教えてくれる人などおらず、日本人パートナーと二人三脚で走り回っていた。ムンさんは、過重の仕事で「ヒステリー」を起こしていた。それを交際相手の金さんが「すべて聞いてくれ」という。K社で働いてから4年が経った頃、「これ以上この会社にいたらキャリアに発展がない」と考えたムンさんは、退職を決めた。

ムンさんは、現在、顧客支援アプリ関連会社（日本企業）に勤めている。同僚の数も会社の規模も前の会社よりはるかに大きい。顧客に会社の商品を紹介するために豊富な知識が求められている。そのため、常に勉強モードの職場で、同僚が本を読んだり、勉強したりする姿をみると「刺激を受け」という。その刺激がなければ「一人じゃ勉強しなかった」。それ以外も同僚からの学びとして、「相手を傷つけるような言動を」しないことを心掛けている。同僚のYさんの言動に不快な気持ちになったことがあった。

ムンさん：＜前略＞なんか皮肉っぽく“ムンさん、こういうときは、外

国人じゃないみたい”って嫌みっぽく会話の途中に言うんですよね、あなたは外国人だからみたいな、それをかぶせて会話をするんです<中略>私は、私が外国人であることをベースにした会話はあまり好きじゃないんですよね、そんなこと（他の同僚は）誰も言わないのにYさんだけ、ずっと言うんですよね。（私が）あまり気を悪くしたりする場面ってないんですけど、その時だけはちょっと、だから私も外国人に対してそんなこと言わないと思ったんです。10年住んでるのに日本語うまいですねーって言われるのもちょっとウケる話じゃないですか<笑>だからそんなこと言っちゃいけないと思ったんです。あれだけは嫌でした。

かつてのムンさんも、「韓国と日本というふうに、二つの世界に分けて」物事をみていた。しかし、「今はグルーピングしないでみるようになった」という。現在の会社に転職をした理由も、「日本企業だから」ではなく、「この会社が好き」で選んだ。インターンシップの経験を境目に「この人のカテゴリーはこうで、この会社のカテゴリーはこうでというふうに考えない」ようになったという。大学時代に「外国人」の「私は非主流という気持ち」があった。しかし、現在は、外国人であることがかえて「メリット」だと感じている。「今も非主流で」あることに変わりはないが、「優越な非主流だと思うようになった」。これまでの日本語学習において、「ネイティブのようにしゃべろうという努力は特にしていない」。ムンさんにとって日本語を話すことは、「文法とかそういうレベルではなく」、それよりも日本の文化や日本の発想を理解しているかどうかが重要であり、それが「理解できれば」、「真のコミュニケーション」が可能になると考えている。自分が「話したい内容が話せ」、「相手から聞きたいことを聞け」、「提案すること」ができれば良い。「ネイティブのように」話す必要などない。自分らしい日本語を話すことで、自身の「キャラクター」を「仕事に活かすことができる」と語った。

ムンさん：＜前略＞正直私がネイティブのように話せたとしても、韓国人であることに変わりはないし、ネイティブのように話すことにこだわる必要あるのかなと（思います）。「ざじずぜぞ」の発音ができないとか＜笑＞、私いつも（同僚に）からかわれるんですよね＜笑＞「ざじずぜぞ」できないって。でも、それが一つのネタになりますよね、そういうのは逆に面白いと思うんです。“日本語上手ですね”と言われたら、私はいつもこういうんです。“「ざじずぜぞ」の発音ができなくて＜笑＞いつもからかわれてますけどねー”って。そうすると相手が笑うので、アイスブレイキングになりますよね。

「無理」をせず、「正直」でいることで、会社で「憎まれないキャラクター」を得たという。「自由が保障」される現在の職場で働くことによって、人生で今が「もっとも輝いている」と感じているとムンさんは言う。高校時代、日本への留学を決断したのは、「最善で最高の選択」であったとムンさんは振り返る。日本語を話すことで「人生の視野が広が」り、「1億（日本人）5千万人（韓国人）とコミュニケーションができる」ような存在になったとムンさんは言う。

6. 考察

以上のインタビュー調査の分析を踏まえて、6節では様々な出会いや経験を通して協力者たちのアイデンティティがどのように構築されてきたのかについて考察していきたい。

6.1 ジナさんのストーリーの考察

ジナさんは、大学受験に失敗し、日本の大学に進学するために来日した。浪人も考えたが、韓国では浪人をした時点でマイナスイメージになるため、普通の大学を出ては競争力に欠ける。海外留学で挽回を図ろうとしていたこ

とが推測できる。佐藤（2014）は、2000年代前半に来日した多くの私費留学生は、「留学前に何らかの挫折経験を味わっているものが多」（p.59）く、彼らが日本社会で生きることは、「自己形成のプロセス」であり、その経験を「自己の成長」としてとらえていると述べている。韓国社会において学歴は、より良い就職機会を得る重要な要因である。有田（2006）によると、韓国では、高い学歴を持った人材を好む企業文化が根強く、高学歴化現象を急速化させている。さらに、大手企業など収入が安定した企業への就職は狭き門となっており、4年制大卒以上の学歴を持った合格者が多数を占める。このような韓国の社会現象から見ると、ジナさんが「日本の大学を出たほうが就職するにあたり周りの友達より少し有利になる」（ジナさん）と考えたことは不自然ではない。ジナさんが日本への留学を決心したのは、必要に迫られた選択であり、将来韓国での就職に役立つ学歴、つまり「文化資本」（ブルデュー 1989, Norton 2013）を獲得するためだったと言える。文化資本の獲得へ向けた「投資」（Norton 2013）として日本語の学習を始めた。来日後、日本語を学び、日本の大学への進学を果たしたことで、ジナさんは大きな自信を得たに違いない。佐藤（2014）は、留学生が母国では入ることのできなかった大学へ進学を果たしたことは、「自信回復になるとともに、日本留学を肯定的に意味づける」（p.60）要因になると分析した。内向的だったジナさんは、大学入学と同時に、「積極的に前に出るようになった」（ジナさん）。それによって日本語への「投資」もより積極的に変化した。大学生活を授業だけで終わらせるのではなく、部活やサークルを通じて、友達を作る機会を増やし、日本の文化を学びたいと考えた。剣道部で外国人はジナさんたった一人だった。母語話者中心の「不均等な力関係」（Norton 2013）にあった組織の中で、韓国文化と日本文化の違いを経験した。「戸惑いはあった」（ジナさん）が、日本社会に応じた正統な文化を理解し、彼らに近づこうとした行動は、日本社会における「知識・教養」（ブルデュー 1989）を獲得するための「投資」の一環であったと考えられる。ジナさんは、社会人になってから日本語により執着するようになった。「与えられた仕事を完璧に」こなすた

めには、「日本語をより完璧にしないといけないと」（ジナさん）と考えたからだ。「周りに迷惑かけたくない」、「自立した」（ジナさん）自分でいたいという意識が、ジナさんの職務に対する姿勢に影響を与えていると言えよう。そのように考えるようになったのは、「周囲に自立した人たちが多かった」（ジナさん）ためだとジナさんは語っている。横須賀（2014）は、同じような属性を持つ人々が集まる学校のようなコミュニティから、会社で様々な背景を持つ人々と接することで、「他者たちを鏡として投影された自己を認識」（p.70）するようになると述べている。社会人になって10年以上たつジナさんにとって働く意味は、単なるお金を稼ぐためだけではない。ジナさんにとって仕事は、持続的に「成長」できるか否かが重要なキーになっている。「熱心に努力をすれば報われる」（ジナさん）という信念を持ち、自身が成長できる場を探し求め続けた。「社会人でない自分を想像したことがない」、「成長が止まってしまう」（ジナさん）自分を想像できないという。

企業の社風は千差万別であり、その企業に見合った人間になることは避けて通れない。守屋（2012）は、日本企業が外国人社員に求める能力について述べ、相手や場面によって使い分けられる「コミュニケーション能力」や相手の気持ちを読み取り「場の共有」ができる、より「日本人化」した外国人を採用する傾向が強いことを指摘している（p.32）。つまり、日本企業は、企業に特化した「日本語力」、「振る舞い」、「知識」などの「文化資本」を外国人に求めている。それにどう向き合うか、どんな行動を取るかが、ジナさんが選び取ったアイデンティティの結果であると言えるのではないだろうか。その中で「成長したい」、「自立した」（ジナさん）自己を確実に成し遂げている。ジナさんにとって日本語は、成長の証として意味づけられている。

6.2 ムンさんのストーリーの考察

韓国では、一般的にソウルの大学を目指すか、それが難しければ、地方の国立大学を目指し、韓国の大企業に入ることが成功のコースとして、根強く認識されている。田舎の慶州には、留学に対する情報がほとんどなく、ムン

さんの高校から国外の大学に留学した前例はなかった。ムンさん自身も高校1年生のときの修学旅行の出来事を経験するまでは、留学という言葉に触れることなく、名門高校から韓国の名門大学へ進学するという韓国の普遍的な成功コースに向かって進んでいた。しかし、修学旅行で出会った日本人女性との出来事は、「日本語でコミュニケーションができる」（ムンさん）私を発見させ、新しいアイデンティティ構築へ向かわせた。そして、その出来事は、積極的な日本語学習へとつながった。ムンさんが留学を周囲に打ち明けた際に、両親や友達からことごとく反対された。それでもムンさんは、韓国の成功のコースに向けての過程として組み込まれていた「ヤザ」を回避し、日本語スクールに通い続け、日本語の勉強にのめり込んだ。ムンさんが「何かを切実に願ったのは、高校のとき日本に行くと考えたのが最初で最後かもしれない」（ムンさん）と振り返るように、現実とは違う新しい世界に対する強い願望があった。韓国社会の普遍的な「集団アイデンティティ」（中井2017, 植松2010）に反する形として、日本語が得意な自身の「文化資本」（ブルデュー1989, Norton 2013）が活かせて、さらには自身の能力を極めることができる日本への留学を決心したのであろう。父から許されたのは、1年限りの留学だった。それにもかかわらず、ムンさんは自ら「EJUのクラス」を受けるなどし、大学進学のための「投資」（Norton 2013）を行っていた。しかし、日本の大学に進学したものの、ムンさんが夢見ていた楽しい学校生活とは程遠い現実があった。「私は非主流」という意識がムンさんの心の中心となり、「自分らしく」（ムンさん）いられることができなくなってしまった。日本人ばかりのグループの中で、ムンさんは、自身の名前を名乗るときから、違う視線を感じ、萎縮していた。自身だけが外国人、韓国人であるという意識によって、日本人と交わることが出来なくなってしまった。三代（2011）は、Norton（2000）に依拠し、「『話す権利』が、正統な話者として認められることがことばを学ぶ上において重要である」（p.85）と述べている。さらに「日本語教室」は、正統な話者として「話す権利」が「保障」される「場」であるが、それ以外の場では、話す権利が保障されない可能性があることを指摘

している。ムンさんは日本語学校とは異なり、大学では「話す権利」(Norton 2013)を持つことができないでいた。自分らしくいられる場を、韓国人の交際相手によって埋めていたのであろう。

日本企業でのインターンシップの経験は、私は非主流という意識を変化させた。インターンシップのメンバーは、ムンさんの意見を聞いてくれる人々であり、彼女の活動の姿を高く評価してくれた。自身のアイデンティティが否定されず認められたことで私は非主流というアイデンティティから解放されることができたのではないだろうか。ムンさんの意識の変化を可能にしたのは、外国人「個人が有能な成員として認められた社会集団」(青木2011)があったからだと言える。インターンシップでの経験は、その後のムンさんの日本生活において大きな影響を与えている。ムンさんは、他人から日本語が上手な外国人という「カテゴリー」(ムンさん)に入れられ、評価されることを望んでいない。彼女において、「日本語と韓国語には境目がなく、自身を、複数の言語を話す「能力」を持ち、「1億5千万人とコミュニケーションができる」「優越」な「一人の人間」(ムンさん)として位置づけている。ムンさんにとって、これまでの日本語学習は、正しい文法や発音を極めることではなかった。ムンさんが目指す「真のコミュニケーション」(ムンさん)が可能な存在であるためには、日本の文化や発想への理解が必要であると考えている。青木(2011)は、第二言語ユーザーが「昔の社会的なアイデンティティを維持したり、自分で選んだ新たなアイデンティティを作り上げるには」、「彼らが日々誰と接するか」(p.254)に、その成功がかかっていると指摘している。ムンさんは、ネイティブのような日本語を話すことが目標ではなかった。「ざじずぜぞ」の発音ができなくても、「てんねん」な発言をしても、韓国人だからという視線で彼女を見るのではなく、彼女の「キャラクター」(ムンさん)として受け入れてくれる環境の中に彼女はいる。「無理」をせず、「正直でい」ることで、かつてのない「もっとも輝」かしい自分を手に入れたのだらう。

7. おわりに

本稿は、社会人として日本に住む外国人は、環境の変化や日本社会への適応の中で、自らのアイデンティティをどのように構築し、暮らしているのかを考察してきた。従来の研究は主として留学生を分析の対象としたのに対し、本稿は、元留学生社会人の現在に至るまでの第二言語習得とアイデンティティの関係と変化を明らかにした。分析対象者は、留学生から社会人への環境の変化の中で多様なアイデンティティを構築していた。具体的には、自身がおかれた環境において、実現したい自分を探し、その実現に向けて日本語への投資が行われていた。

本稿は、第二言語習得の研究分野に対して、2つの意義を持つと考える。第一に、日本語・日本文化への理解（文化資本）は、外国人のさらなる資源獲得（進学、就職など）を支える最も重要な意味を持つことを明らかにした。特に、文化資本と資源獲得の関係は、個人によって異なり、その関係は実現したい自己の内容によって条件づけられる。協力者たちが実現したい自己は、彼女らが置かれた環境において、他者との相互作用の中で構築されている。第二に、本稿の知見は、日本で働く外国人が日本語や日本文化に直面して困難を感じる存在としてとらえる先行研究の外国人象は、ステレオタイプであり、日本在住外国人を一面的にとらえていることに警鐘を鳴らしている。本稿において、2人のストーリーに共通して感じられたのは、多くの先行研究で挙げられている日本で働く外国人の職場での難しさについては、彼女らからは語られず、日本での職場生活に概ね満足している。韓国の厳しい競争社会から回避するために来日した彼女らにとって日本は、新しい可能性を与えてくれる場所であった。

[注]

- 1) ブルデューは、社会の中で有力な資本として、経済資本、文化資本、社会関係資本の三つに分類している。ブルデュー（1989）によると文化資本（capital cultural）とは、「広い意味での文化に関わる有形、無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など（身体化された文化資本）、書物・絵画・道具・機械のように、物質として所有可能な文化的財物（客体化された文化資本）、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など（制度化された文化資本）、以上の三種類に分けられる」(p. v)としている。
- 2) メリアム（2004）によると半構造化インタビューは、「個々の回答者が独自の世界観を有していることを前提」としており、「質問はより自由な書式（open-ended）であることが求められる」(p.107)としている。事前に大まかな質問事項を決め、ある方向性を保ちつつ、協力者の状況や回答に応じて、質問の順序や内容などを臨機応変に変えることができる（保坂・中澤・大野木 2000）。
- 3) ストーリーの中で使用した「 」記号は、協力者が語った言葉を直接引用した部分であり、()は、省略された部分等についての筆者による補足説明である。
- 4) 学校にもよるが、高校3年生（1年生から始める学校もある）から、授業が終わった後、学校に残り自習を行う。妥当な理由があれば、早退することもできるが、そのような学生は稀である。受験勉強に逃げ道はなく、徹底的に管理される。おおむね朝7時半から学校に行き、夜22時まで勉強するのが一般的である。その後、さらに、校外の自習室に向かう子も珍しくない。

[参考文献]

- 青木直子（2011）「学習者オートノミーが第二言語ユーザーを裏切る時—3つのレベルの社会的文脈の分析」青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房，pp.241-263.
- 有田伸（2006）『韓国の教育と社会階層：「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版会.
- 池田庸子・八若壽美子（2016）「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』14：49-66.
- 植松晃子（2010）「異文化環境における民族アイデンティティの役割—集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係」『パーソナリティ研究』19(1)：25-37.
- 川上郁雄（2015）「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけ

- るライフストーリー研究の意味」三代純平編『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ』くろしお出版, pp.24-49.
- 小泉聡子 (2011)「多言語話者の言語意識とアイデンティティ形成—「ありたい自分」として「自分を生きる」ための言語教育」細川英雄編『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』春風社, pp.138-158.
- 佐藤正則 (2014)「日本語教育を実践する私がライフストーリーを研究することの意味—元私費留学生のライフストーリーから」『WEB版リテラシー』14: 55-71.
<http://literacies.9640.jp/vol14.html#satoo>
- 中井好男 (2017)「滞日中国人のライフストーリーから見る自我アイデンティティの交渉と構築—なぜ永住権を目指して働き続けるのか」『質的心理学研究』16: 116-134.
- 原田麻里子 (2015)「元留学生社会人の「定住・定着」感の考察：その意識構造の把握を試みて」『キャリアデザイン研究』11: 5-18.
- ブルデュー, ピエール (1989)『ディスタンクシオン I：社会的判断力批判』石井洋二郎訳, 新評論.
- 坂坂亨・中澤潤・大野木裕明編著 (2000)『心理学マニュアル面接法』北大路書房.
- 三代純平 (2011)「「場」としての日本語教室の意味—「話す権利」の保障という意義と課題」細川英雄編『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』春風社, pp.75-97.
- メリアム, S., B. (2004)『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫・久保真人・成島美弥訳, ミネルヴァ出版. (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*. New York: John Wiley & Sons.)
- 守屋貴司 (2012)「日本企業の留学生などの外国人採用への一考察」『日本労働研究雑誌』623: 29-36.
- やまだようこ (2007)「ライフストーリー・インタビュー」やまだようこ編『質的心理学の方法—語りをきく』新曜社, pp.124-143.
- 横須賀柳子 (2007)「企業の求人と留学生の就職に関する意識比較」『留学生教育』12: 47-57.
- 横須賀柳子 (2014)「職業探索段階の留学生によるアイデンティティ変容—日本企業でのインターンシップ参加者の事例から—」『言語教育研究』5: 59-77.
- 横須賀柳子 (2015)「元留学生外国人社員の就業の現状と課題—2014 年度調査中間報告を中心に—」『留学交流』48: 8-21.
- Aoki, N. and Kobayashi, H. (2009) Defending stories and sharing one: Towards a narrative understanding of teacher autonomy. In Pemberton, R., Toogood, S., & Barfield, A.

- (Eds.). *Maintaining Control: Autonomy and Language Learning* (pp.199-216). Hong Kong University Press.
- Norton, B. (1995) Social Identity, Investment, and Language Learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.
- Norton, B. (2000) *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. London: Longman.
- Norton, B. (2013) *Identity and Language Learning: Extending the Conversation* (2nd ed.) Bristol, UK: Multicultural Matters.

(大学院博士前期課程修了)

ABSTRACT

Life Story on the Transition from Being an International Student
to an Employee:
Japanese Language Acquisition and Identity of Koreans Living in Japan
Hyunjoo LEE

Sustaining a workforce has become a critical issue in Japan as it has faced a low birth rate and an aging population. The Japanese government is actively accepting human resources from abroad by establishing the “300,000 Foreign Students Plan,” “Points-based Preferential Immigration Treatment for Highly Skilled Foreign Professionals,” and the “Expansion and Acceptance of Foreign Workers” agendas. Although much previous work has drawn attention to the language acquisition and identity of international students in Japan, research on foreigners who stay and work in Japan after graduating from university in Japan is limited. Gaining an understanding of their situations and needs is essential to the retention and extension of human resources from abroad.

By conducting a semi-structured interview with two Koreans who attended university and work in Japan, this article examines what they have experienced, what they have perceived from the experience, and how their Japanese language acquisition and identity have changed. The article finds that foreigners in the transition from student to employee have developed diverse identities through their interactions with others. The findings suggest that the participants have looked for “their ideal self” and invested actively in developing Japanese skills to realize it.